

CONTENTS

特集

世界の 国際交流拠点へ — 5

医療研究★最前線「未来医療を拓く」—— 16

消化器病態学分野 **渡辺 守** 教授

眼科学分野 **大野京子** 准教授

分子細胞機能学分野 **森田育男** 教授

附属病院◎診療科訪問 ————— 20

医学部附属病院
スポーツ医学診療センター

卒業生の今「活躍する医科歯科人」—— 21

NTT 東日本関東病院
歯科口腔外科 歯科衛生士

松浦理恵さん

医科歯科大生 File ————— 22

「自ら問い、自ら導く学生たち」

歯学部歯学科5年 **井上 維**さん

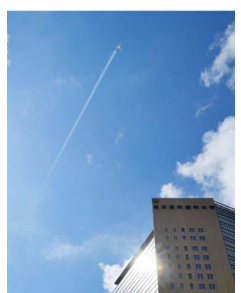
新設◎教育課程 ————— 23

大学院医歯学総合研究科
システム発生・再生医学分野

大学院医歯学総合研究科

臨床腫瘍学分野

Campus Information ————— 25



今号の表紙

東京医科歯科大学は現在、26の国・地域の72機関と学術・学生交流協定を結んでいます。本特集では、未来の医療をリードすべく、さらなるグローバル展開を進めようとしている大学の今をお伝えします。



東京医科歯科大学の学長室には、世界の学術・学生交流協定先から、招聘された教員や留学生が訪れています。

本学の国際戦略

東京医科歯科大学学長 **大山喬史**

本学は、大学のミッション「知と癒しの匠を創造する」の下に、3つの教育理念を掲げている。それは、1. 幅広い教養と豊かな感性を備えた人間性の涵養、2. 自己問題提起、自己問題解決型の創造的人間の養成、3. 国際感覚豊かな医療人、研究者養成である。

近年、あらゆる領域でグローバル化が叫ばれている。知識、技術、文明を世界で共有しようということである。当然、医療の世界も同じである。世界の国数195以上、人口71億、すべての国、すべての人は何らかの形で医療を必要とする。国が、個人がどのような経済状況でも、今ある最高の医療で対応することが望まれる。

そこで、我々医療系の教育者、研究者に求められることは、今できる最高の医療を実現 提供すること、しかもその医療コストをできるだけ抑えることである。そのため開発研究、その知識と技術を備えた医療人養成が本学の使命である。そうした背景の下に、本学は、ここ数年、国際感覚を備えた医療人、研究者養成に力点を置いてきた。

2009年、本学では、どちらかというと、それまで留学生のお世話係にとどまっていた「留学生センター」を改組し、新たに「国際交流センター」を発足させた。それまで、本学からの海外派遣、海外からの留学生・研究生の受け

入れ、その研究・教育の実施内容、そしてその実績などについての情報収集・管理は、必ずしも大学として一括管理できていなかった。

今でこそ、26の国・地域の72機関と学術・学生交流協定を締結しているが、それまでは、各部署単位に任されてきた。ことに国際交流にあつては、その継続が最も大事であるにもかかわらず、例えば、本学や日本への理解があり、母国の医療界で活躍している帰国留学生との連絡が途絶えてしまっているケースがあった。そこで今後は、本学にとって貴重な財産である帰国留学生との連絡網づくり、その他協定校・機関との人事交流、研究連携などの実績を「国際交流センター」が一括管理することとした。

本学は、世界がグローバル化する中で、日本の文化に根付いた教育、研究、臨床を創出できる医療人の養成を目指している。「良い国際人になるには、まず、立派な自国民になりなさい」「自国知つてこそ真の国際人」たり得るという言葉を思い出す。それは日本人としての節度を保ちながら、独自の哲学を踏まえた言動のできる知識人を意味しているという。学生には、教養部でできる限り日本の文化を身に付けてもらい、その上で異国文化の中で、研修、研究の体験をしてもらう様々な海外研修研究奨励

制度を本学では準備している。

まず、医学部、歯学部すべての学生を対象に、学科、専攻によつて配分員数に違いはあるが、海外短期派遣制度に基づいて、総勢13人の学生が、教員のアドバイスとそれぞれの希望に沿つて様々な国に派遣されている。別途、3つの本学の海外研究拠点、すなわち新興・再興感染症研究所（ガーナ・野口記念医学研究所／2009年開所）に医学科の学生（6人）、東京医科歯科大学・ラテンアメリカ共同研究がん拠点（チリ／2010年開所）に医学科の学生（6人）、チュラロンコン大学・東京医科歯科大学研究教育協力センター（タイ／2010年開所）に医学科の学生（2人）が数カ月、歯学科の学生（6人）保健衛生学専攻の学生（4人）が2週間ほど派遣されている。学生たちは、短期ではあるが、本学から派遣されている常駐研究者と共にする海外生活、研究生活を体験する。在学中でありながら、海外常駐研究者の姿を目の当たりにし、国際貢献のありよう、連携研究の楽しさ、現地での人材育成の喜びを体験することで、目に見えて成長、自立した感がある。また、彼らが国際人としての将来像を描くに当たり、そのモチベーションを高める一助となるものと期待している。

海外研究拠点の研究推進の場、現地での人材養成の場、技術移転の場であることはもちろんであるが、本学の学生の国際人としての感性を涵養する場としても活用している。

また、医学部医学科6年生(8人)をハーバード大学での臨床実習体験に、医学科4年生(4人)をインペリアルカレッジに研究体験で派遣している。なお、インペリアルカレッジ

については、先方から4人の学生を研究体験で受け入れている。学部入学生275人のうち、自費留学を含めれば、60人近くの学生が学部時代に留学経験を積んでいる。

中でも、ハーバード大学との連携教育協定に基づく学生の派遣は、2004年に始まり、2012年度まで、その学生数は64人になる。帰国した学生は、それまでの受動的な思考・姿勢からすっかり能動的な学生に変身したと自負している。そうした上級生の姿は、下級生にとっても大きな励み、魅力となっている。将来このような学生が中心となり、本学が目指すグローバル教育の創造、実現に大きな役割を演じてくれるものと確信している。そのような意味で、大変参考になったのがハーバード大学

医学部の教育カリキュラム「New Pathway」であった。

その何たるかを知るために、まず教員を派遣した。学生の臨床実習派遣は、その2年後になる。帰国後は毎年、教育する側(教員)からの評価、受ける側(学生)からの評価を基に、それぞれの価値観を共有しながら議論を重ねてきた。教員にとっても、学生にとっても、自身のあるべき姿を見極めるいい機



会となった。何といっても、本学の医学教育のさらなるレベルアップの可能性と必要性に気づいたことが大きな成果だったと思う。

派遣された学生は、ハーバード大学で経験したことから、自分がどう学習すべきか、大学は教育面で何を考えるべきかまで踏み込み、「本学臨床実習への提言と医学教育に関わる各アクターの行動指針」として取りまとめました。これには斬新な発想が含まれ、今動いている「医学融合教育」に立派に反映されている。

これまで、ハーバード大学におけるリーダーシップコース並びにチューターFDに参加した医学部、歯学部、教養部教員はおよそ130人になる。ポストンでは、自分たちで設定したミッションに沿って、その実現のため昼夜を問わず活発な議論が行われたと聞いている。日本にあつては、なかなかそうしたまとまった時間をとり、教育について議論する余裕はないと思われるが、数日にわたって、集中的しかも総括的に議論できたことが、参加した教員の叡智の集約につながったのだと思う。帰国後はその報告書に基づき、教員FDであらためて議論が重ねられた。当然そこでは、学生の提言もフィードバックされ、議論の対象となった。その成果が今日の「医学融合教育」である。さらに、それを常時見直し、ブラッシュアップしていくセンターとして、医歯学融合教育支援センターを立ち上げることにつながった。大学院生についても、別途海外研究奨励制度を立ち上げ、延べ8人の海外研究を支援することとし、2011年度は3人が派遣された。

本学は、このように海外研修・研究支援制度をもつて、学生や若手・中堅研究者に対して留学研修・研究を積極的に推奨している。

一方、海外からの留学生の受け入れについては、現在、数多くの学生交流協定を締結しており、こうした大学・

地域を中心に210人の留学生(2012年5月現在…大学院生/188人、学部学生/7人、研究生/12人、日本語研修生/3人)が本学に在籍している(国費留学生/89人、自費留学生/121人)。特に、アジア圏からの留学生数は、全留学生の9割を占め、医歯工連携分野では、本学は圧倒的多数の留学生を抱えている。

また、本学ではアジア、中近東から優秀な若手研究者を大学院に呼び込むことを目的に、2009年度から、毎年国際サマープログラム(ISP)を開催している。このプログラムでは、設定された研究テーマに沿って、海外から参加希望者を募っている。毎回80~90人の応募者があり、書類選考で選ばれた24~25人を本学に招聘している。さらにその中から、学内見学やシンポジウム、面接を通して、特に研究心旺盛な者、3~4人を大学院生として受け入れている。これには、公的奨学金寄附金とは別途に本学の奨学金を付与している。このプログラムをきっかけに国費留学生に採択されたものを含めると10人以上の留学生(国費留学生も含め)が大学院に在籍している。

既に帰国した留学生は、教育・研究・医療などのそれぞれの領域で活躍し、本学との緊密な交流、情報交換を通じて、人材養成・共同研究に発展している。

こうした本学の国際戦略が認められ、2012年度、グローバル人材育成推進事業(主として先進国への派遣)、世界展開力強化事業(タイ、インドネシア、ベトナムの提携校との学生の派遣・受け入れ)という2つの大型プロジェクト(5年間)が採択され、大きな前進が図れることになった。これもこれまでのOITMDUで進めてきた国際戦略の努力が認められたが故であり、ここで、その期待に答えなければならない大きな責務を担ったことでもある。

今後、こうした国際戦略を継続的に展開させ、国際交流・研究連携の拡充と充実に向け、一層の努力を積み重ねてゆくことが、何よりも重要である。



左上:ハーバード大学でのリーダーシップコース(2011年)に参加した教員たち。
中:タイのチュラロンコーン大学と共同で無歯科医村の歯科保健活動を行った。
左下:ガーナで感染症について講義するウイリス学専門の井戸栄治教授。